■H30.2.5　市長定例記者会見内容
日時　平成30年2月5日（月）午前11時～45分
場所　庁議室
出席　市長、企画振興部長、商工観光部長、政策推進課長、農政課長、社会教育文化課長、
酒田記者クラブ　11社（毎日新聞、山形新聞、荘内日報、朝日新聞、河北新報、読売新聞、YBC、YTS、TUY、SAY、NHK）

■内容
1.記者発表事項
第24回酒田市土門拳文化賞受賞者決定のお知らせについて
市長／第24回「酒田市土門拳文化賞」の受賞者が決定した。「酒田市土門拳文化賞」は、本市出身の世界的な写真家・土門拳氏の文化芸術への功績を記念するとともに、写真文化、写真芸術の振興を目的に創設されたもので、土門拳記念館開館10周年を機に平成6年度から始まり、今年で第24回目を迎えた。
今回は、全国36都道府県のアマチュア写真家、131人から、146テーマの作品の応募があった。ちなみに、山形県の方の応募は10人で、そのうち酒田市からの応募は6人。
1月15日（月）に、東京において選考委員会を開催し、資料のとおり土門拳文化賞1作品、土門拳文化賞奨励賞3作品が選考され、決定した。
酒田市土門拳文化賞受賞作品は、「「俺は負けない！」終(つい)の住処(すみか)で…」、モノクロ30枚組の作品。作者は、石津 武史さん、74歳、奈良県北葛城郡王寺町在住の方。
続いて酒田市土門拳文化賞「奨励賞」の受賞作品は3点。
1点目として「命のうた　響き合うリズム」、カラー30枚組の作品。作者は、平野君子さん、76歳、神奈川県相模原市在住の方。
2点目として「里山の守(もり)人(びと)たち」、カラー30枚組の作品。作者は、上原ゆうこさん、68歳、宮崎県宮崎市在住の方。
3点目として「Children at Risk」、カラー30枚組の作品。作者は、清水 匡さん、47歳、千葉県船橋市在住の方。
いずれも30枚の大作。作品コメントなどは、資料参照。
なお授賞式を3月4日（日）午前10時から土門拳記念館で行う。また受賞作品展を、土門拳記念館、ニコンプラザ新宿、ニコンプラザ大阪で開催する。
第24回酒田市土門拳文化賞受賞者については以上。
記者／石津さんは第17回の奨励賞を受賞しているが、以前奨励賞を受けた方文化賞を受けた例は他にあるか。
社会教育文化課長／石津さんで3人目。

記者／作品に出てくる方はインターネットに上げても問題ないか。
社会教育文化課長／プレス用の写真は本人に確認取れている。
記者／受賞者全員の生年月日が分かる資料いただきたい。
社会教育文化課長／後ほど記者クラブを通して配布する。
記者／授賞式は受賞者全員参加するのか。
社会教育文化課長／全員出席予定。

2.フリー質問
①サンクトペテルブルクへの訪問について
記者／サンクトペテルブルク出発の意気込みと、どういった成果を持ち帰れたらいいか伺いたい。
市長／新たに始まる交流に期待が高まっている。今回は市保有の古今雛や傘福、啓翁桜、そして酒田舞娘も同行する。酒田の魅力をエルミタージュ美術館という世界最高峰の舞台で披露できるので、これがきっかけとなり人と人との交流、啓翁桜をもっと売り込むという点で経済交流につなげていきたい。

②麻生大臣への高速交通インフラの整備要望について
記者／麻生大臣に庄内開発協議会会長として高速交通インフラの整備について要望したが、その際に大臣から「要望の実現性を向上させるには、得られる効果について数字で示す（証明する）ことで、予算がつきやすくなる」と言われた。その点について、今後変わるのはどのような作業で、今どのような作業が進んでいるのか。
市長／要望書の中身の一つは、日沿道、新庄酒田道路の整備促進というもの。もう一つは庄内空港の滑走路を 2,500m に延長するための国庫補助採択要件を拡充してくださいというもの。3 つ目は、羽越新幹線を整備計画路線に格上げするための法定調査を実施してくださいというもの。タイトルとしては高速交通基盤の整備促進というものになる。これまでは過去の実績を重視したデータを添付して要望してきた。これからはそれらが整備されることで、今後どういうふうに地域経済のデータが右肩上がりにあがっていくのか推計した数値データで示した上で要望項目を挙げる必要があるのでないかというご示唆をいただいた。推計データではあるが、整備したことにより出る効果を数字として示したほうが説得力が増すと理解した。情緒的に要望しても、国としては安易に予算はつけられないといった財務大臣としての視点でご示唆いただいたと思っている。
記者／アプローチの仕方が変わるということは、コンサルに頼んで調査しないと読めないところもあると思う。その分開発協議会の予算を増やすことも場合によっては出てくるのか。
市長／今のところは予算を持っていない。自助努力でやれることはやるが、コンサルをかけないと数字として表せないのであれば、委託するしかないのかもしれない。そこは

これから。

3 その他
①黒森歌舞伎について
記者／ポーランド公演の件で、資金調達はどのように考えているか。
市長／クラウドファンディングや、国・県の補助も入れたい。民間団体の寄付なども頼りにしながら資金調達の方法を考えていかなければならない。市としても支援はしていくが限界がある。文部科学省や外務省の力も借りながら成功に導きたい。
記者／ポーランドという新しい交流の種が一つできたわけだが、市長も一座と一緒に行くことは考えているか。
市長／黒森歌舞伎の人達が作ってきたパイプをつないでいこうという事業なので、行政が直接仕掛けに関わったわけではなく、市としては応援していくとうスタンスなので関係者を中心に渡航する。今はどちらともいえない。町対町になるようであれば、相手に対して敬意を欠くようなことにならないように、代表として市の誰かが行かなければならない。

②風力発電について
記者／意見書の中で、他の市町村の見本となる対策を進めるとあるが、具体的にどんな対策を取るのか。
市長／市の環境基本条例に基づき、事業者としっかり協定を結んで環境被害に対して、市も監視をするし、事業者も条件をきっちりこなし環境の保全に務める。そういうスタンスで向かいたい。具体的にはこれからの話になる。被害防止のためには最善をつくし、事業者にも働き掛けていきたい。
記者／事業費をペイできるか。環境保全対策などにはお金がかかる。
市長／財源としての収入をしっかり確保し、地域づくりに生かすというものなので、全く収益が上がらない発電事業をやるつもりはない。
記者／新年度予算で何らかの予算を盛り込むの予定はあるか。
市長／ある。
企画振興部長／新年度当初予算には載らないが、許可が下りれば補正対応で予算化したい。
記者／許認可制度について、疑問に思うことがある。県や市が事業主体なのに、市が意見を述べたり、県知事が許可したりする制度に疑問を持つ。もっと違ったやりかたがあるのでは。副市長は行政の制度などを学問の対象にして研究されているので、制度についておかしくないのか意見を伺いたい。
副市長／内部組織の中では明確に分けている。事業者としての主張と地域機関としての主張を分けている。県もそうしていると思う。

記者／たとえばニュージーランドなど外国では行政が主体となって開発行為を行う場合の許認可はどこで行っているのか。
副市長／ニュージーランドについては、環境に市民の関心が高いこともあり、環境に対してチェックするような独立した機関が設けられている。
記者／日本もそういったシステムが必要ではないかという考えはないか。
副市長／環境に限らないが、行政から独立した公的機関の必要性はあるかもしれない。同時に公的機関を作ることによりコストもかかってくる。どちらがいいのか市民が、国民が選ぶということだと思う。
記者／今回は県が 3 基、市が 3 基建てる計画だが、今回の場所は風境がいいところ。今回認められれば、同じような基準で他の地域でも鶴岡方面に向かって建つと思われる。環境の専門家は 1 基・2 基ではあまり影響が出ないが、複数できた場合環境に影響があるといっている。全体を見て影響調査をするべきではないかといこともいわれている。今後仮に 6 基が認められたとして、市長としては市分について同じような申請が出た場合、認めていく考えなのか。
市長／県に対して意見を述べることについては、これまで通り環境審議会や景観審議会の意見をいただきながら県知事に対して、市長としての意見を述べる、という手順になる。私の立場でどうこう言える立場ではない。
記者／今回出された意見と変わらないということか。
市長／基本的に変わらない。

③中高一貫校について
記者／9 日に鶴岡市主催の中高一貫校のシンポジウムが開かれる予定。3 年目で、鶴岡市として中高一貫校を引っ張ってくるために続けてきたシンポジウムだが、県の教育委員会からもっと詳細な事業説明をしてもらう話になっている。改めて酒田、飽海地区でそういったシンポジウムを市主催または県教育委員会主催で開催してもらう、鶴岡のシンポジウムに酒田市として誰か出席するなど、今後、中高一貫校についての考えはあるか。
市長／鶴岡市のシンポジウムに行くことは考えていない。同じ学区の中の話なのでそういった動きは必要だと感じている。県教育委員会で関係者には説明に回るという話は聞いている。市民、住民が対象の説明の場、市民の間で議論する場がこの地域には必要だという思いがあるので、やりかたについてはこれから考えてなければならない。